

思ふ、宇宙の尊き靈の表現が人なり。靈は肉體を宿として此の世に現はる、故に靈は永久に宇宙に存在して消ゆる時なしと、此に於て心中喜びと望みとを生ぜり。

夕日は漸くかくれ行き、大空は暗くなり、森は墨繪の如くなり、地はうす暗き暮につまれば、鳥は時に歸り、入相の鐘は靜かに響き、かくて秋の夕は眠りに入れり。吾れは秋の夕ぐれを愛す。其のなやめるが如くにして力ある、其の泣くが如くにして光ある、何れの時か之れに如かむ冷かなる風吾が面を拂ひ金色の夕日吾が心に深くしむ。夜月光を踏みて散步す。空清く月明かなり。枯枝虚空に高く、星は其の枝に花を咲かせり。壯大にして崇高なる此景、偉大にして靜寂なる此天地、自然は此美觀を吾が前に提す。あ、何ぞ人事に醒醒たるや、只天を頼まむ、星を頼まむ、月を頼まむ、而して大なる清き情を養はむ。吾れ此の思ひを得たる時あらゆる世の艱難、あら

ゆる人の嘲笑に堪え忍びて單身天地の間に立たむとの情油然而として湧きぬ。

友と山に登りたり。満山皆紅葉、仰げは白雲頭上に在り、俯すれば流水足下に在り。此時吾れ思ひぬ。人の勉強し修養するは高き山に登るが如し。一步一步上るに従ひて眼界廣くなりて、自己の小なるを益々明かに知るに至る。智徳乏しければ自ら足れりとなす、これ山の麓にありて小世界の内の吾れを見るのみと。又思ひぬ。此日此時此人と此處にて遊ぶ。これ最初にして最後なり。再びある可からず。されば、吾れ能ふ限り友につくし、感じ得る限りを感じて、其の深き意義を味はむと。

日々堅實に行ひて倦まず、熱誠を盡して怠らず。碎けざる意志と、燃ゆるが如き強き反省とを以て日を送らむ。いさゝかも外面を飾るなく、自己の内部に存する至誠を遺憾なく發揮せむ、「戦へよ、討死せよ」との語を強く感ずる時、吾が心にいふべからざる確信と勇氣とを生ず。(完)

彙報

第廿四回文科學術談話會

大正元年十月五日午後一時より例の如く講堂に於て開催す。講演順序は左の如し。

一開會の辭

下村 先生

一明治年間に於ける女子訓の變遷

吉田 先生

一和宮親子内親王の御事蹟

文四 杉山 はな

一潜在意識

文四 源 みい

一戰國時代の女性

文三 佐々木 清

開會の辭に附帶して下村先生より爾後文科會の講演者は三四年生に限らず各學年より盛に出で、研究事項を發表するに勉むべしとの御話あり。吉田先生の御講話は本誌別項に記載すれば此處に贅せず。三氏の研究とごりに興深

く且有益なるを覺えぬ。又場の前面には歴史上有名なる婦人の筆蹟を陳列せり。今日の講演が不思議にも女性に關する事多ければとて下村先生より貸與せられしものなり。肉筆あり、寫真版あり、木版あり、巻物あり、書籍状のものあり。これ亦裨益する所少からざりき。

御來臨の先生は吉田先生、下村先生、下田たづ子先生等にして卒業生の來會せられしもの僅に一名なりき。

○新入賛助員  
村田よしを、齋藤彌生

第三回會計決算報告

収入 金八拾五圓參拾六錢

内譯 五拾圓八拾六錢 前回よりの繰越金